View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

アートの記録・再現としての「アートブック」における活字・文字組版表現の研究

A Study on Typographic and Compositional Expression in Art Books as a Medium for Recording and Reproducing Art

赤崎　正一　　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　教授
戸田　ツトム　　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　教授
寺門　孝之　　デザイン学部ビジュアルデザイン学科　教授
橋本　英治　　先端芸術学部まんが表現学科　教授

Shoichi AKAZAKI　Department of Visual Design, School of Design, Professor
Tztom TODA　Department of Visual Design, School of Design, Professor
Takayuki TERAKADO　Department of Visual Design, School of Design, Professor
Eiji HASHIMOTO　Department of Manga Media, School of Design, Professor

要旨

現代アートの表現手法は多様であり、その記録のための「アートブック」も様々な形式がある。また近年、アートの世界では言語表現・文字記号表現を含むものの重要性が増している。したがって従来の画像類の掲載・再現ではすまない記録法が求められている。本研究では考察されることの稀だった文字・組版表現とアートの記録について検証を行う。

事例として2008年10月29日、ビジュアルデザイン学科による独自開催特別講義「Art／内藤礼」を取り上げる。その繊細を極めた表現で国際的に活躍している美術科・内藤礼氏は、また寡黙な作家としても知られている。この特別講義は、自らの作品を語ることにきわめて稀な作家自身の言葉の貴重な記録となった。そうした内藤氏の表現の内実に対応した「本」をつくりあげることが本研究の課題であった。

2009年12月、それは単行本「内藤礼〈母型〉」として刊行された。戸田ツトム教授の全面デザインによるこの単行本化の作業は、そうした高度なデザイン課題への挑戦でもあり、また現代デザインの隘路たる「デザインの消滅を企図するデザイン」への回答とも位置づけられるものとなった。

作家の言葉の背後に広がる深い世界をいかに組版と図版により読者に伝えうるかという、デザインの試行である。

Summary

As means of expression in contemporary art are diversified, art books as a medium for recording art also take many different styles. On the other hand, linguistic and character expressions have recently become increasingly important in the art scene. In this context, there should be a new means of recording art that goes beyond the simple presentation of graphic images in the conventional art books. This course studied typographic and compositional expression in art books as a medium for recording art.

The course focused on exploring "Art / Rei Naito," a special lecture presented by Department of Visual Design on October 29, 2008. Rei Naito is an artist whose refined sensitivity is highly reputed in the world. She is also renowned for being taciturn about her work. The lecture was a very rare opportunity in which the artist talked about her art. The purpose of this course was to make a "book" that reflects the essence of her artistic expression.

The book, Naito Rei < Bokei >, was published in December 2009. Designed entirely by Professor Tsutomu Toda, the whole process of making this book was a challenge to an advanced design issue as well as an answer to the "design intended to vanish design," an aporia in contemporary design.

1）目的

一般的にアートの作品とは、どのようにとらえられているであろうか。わが国において「美術」の概念が成立したのは19世紀末のことである。明治政府による近代化（欧化）の政策の中で、あらゆる文化的枠組み（制度）が更新させられた。たとえば、西欧直輸入の油彩画表現の埒外のものとして、従来からの技法表現は「日本画」として規定成立した。「美術」もまた、それら技法上のカテゴリーを包含する、より上位概念として成立した。それから一世紀を超える時間を経た現代において「アート」の概念は「美術」とは、必ずしも整合一致しないで、われわれの社会の中で揺れ続けている。それは旧来の「美術」の典型であるタブローや彫刻のように、単一製作のもので、原則的に永続的な展示が可能なものであるという概念規定が、ほぼ成立しなくなったからである。

現代の表現の状況は多様である。「アート」と呼ばれるとき、とりわけ「現代アート」と呼ばれる場合には、インスタレーションや、パフォーマンスをふくむことは、きわめて当然のことであり、そこに「実験的」という言葉を挟むようなことは、もはやまとはずれでしかない。

ある程度の恒久性が前提化されていた旧「美術」表現と異なり、「現代アート」においては特定された展示空間・展示期間に限定されることは常態であり、また言語表現・文字記号表現をふくむ、物理的な「かたち」を持たない表現も、さまざまに様相を変えて多彩に存在する。「作家←→作品←→鑑賞者」の関係性の中にゆらめいて、「表現・作品」は固定した受容から、すり抜けてしまうこともしばしばである。

そうした「消え去ってしまう表現・作品」、あるいは「意味そのものが変容してしまう作品」においては「記録」の持つ意味は、より重要性を増してくる。

本研究の主要な目的は書籍の形式の裡にどのように作家の思考、作家の言葉、作品の様態を記録するかという、デザイン作業の試みであり、それは従来あった「画集」「作品集」のように、価値や評価に対する客観性を担保するために制作されるものではない。

非常に皮肉なことであるが、タブローは、その存在の意味や価値を脅かした「写真術」の発明によって、（そして複製技術の核である印刷術によって）はじめて、社会的な認知度を飛躍させ、大衆化した文化の大項目である「美術」として人々のなかに受容されたのである。

こうした「表現←→メディア」の相互依存・相互干渉の変奏は、極端に情報化をとげた現代世界のなかでは、よりダイナミックに生起しつづけて、「不確定性」は更新するばかりである。

そうした認識のもとに、本研究の試行的デザイン作業は位置づけられると考える（図1）。

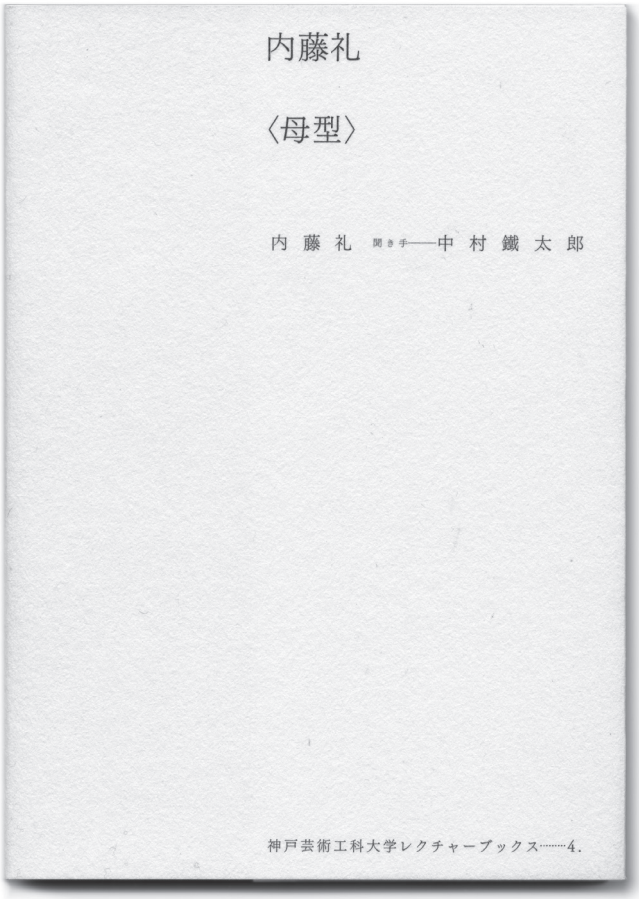

図1）単行本「内藤礼〈母型〉」表紙

2）言葉・本・デザイン

現在のアートの世界において、もっとも繊細で微妙な表現を展開しつづける現代美術家・内藤礼氏は、自らを語ることの少ない寡黙な表現者として知られる。2008年10月29日にビジュアルデザイン学科において特別講義「Art／内藤礼」が開催された。これは詩人・中村鐵太郎氏によるインタビューの形式で行われた、きわめ

て稀な内藤礼氏の作品世界に対するアプローチの機会であった（会場は1225教室）。そこで交わされた言葉の連なりの真相は、どのような精密な音声記録装置によっても、十全に記録することはできない。生きた言葉は発せらるとすぐに空中に消えてしまうのであり、聴講者の心にさまざまな影を滲ませても、それは一様の形ではなく、水のように移ろうものでしかない。そのことは内藤氏の作品の特質そのものであり、講義（インタビュー）はその時間の中における内藤作品の拡張でもあり、浸潤ともいえるものだ。

講義の現場での対話の聴取の体験は稀少な一回性のゆえにかけがえのないものであるが、それはまた他者の言葉として記録されることによって、はじめて（かりそめの）永続性を獲得するものでもある。そして、それこそが「本」が必要とされる最大の契機である。「本」のもつ物質性は、しばしば本来の機能としてのメディア性を裏切って、われわれに予想外の体験をもたらすことがある。それはデザインするものの主体にとってデザインの操作の不可能性と、また同時に未知の可能性を開示するものでもある。そのようにして、ここに定着された「記録」は明らかに（聴取の）体験そのものではない。そしてまた、それは体験の再現を目指すものでもないと言える。それは新しい別の媒体であり、デザインが介在することによって、もうひとつの、作家と作品の不分明な鏡像である「物」として、世界内に長い影を曳くものなのだ。

デザインはしばしばレイアウトの「操作」として語られがちであるが、実は文字（書体）・画像・紙などの物理的な構築による「もうひとつ」の表現でもあるのだ（図2）。これは奇妙な実体化であり、そこにこそ書物の成立の秘密のようなものが根幹に潜んでいる。

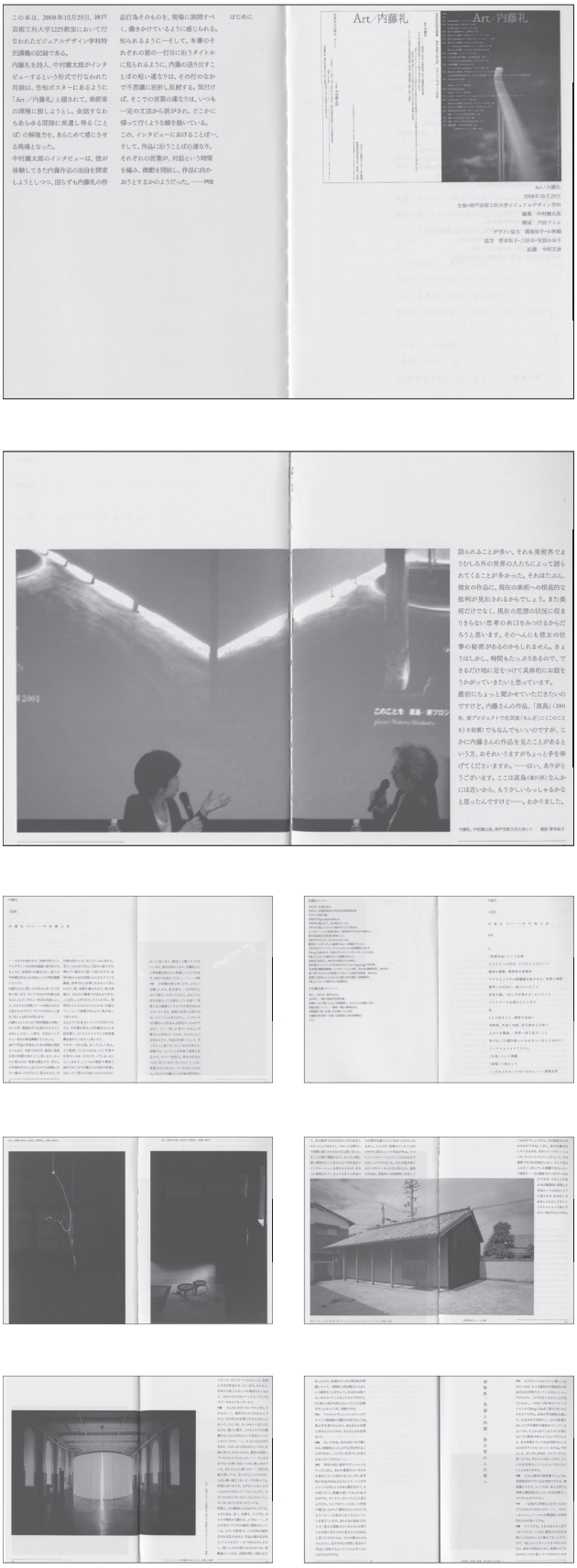

図2）単行本「内藤礼〈母型〉」本文頁